

看護系大学における学生生活実態調査

—学生から見た健康状態と学生生活—

Investigation of the Actual Conditions of Health and Student Life in Nursing College

—A Students' Point of View—

堀家美代子¹⁾, 滝沢美津子²⁾, 北村 愛子³⁾, 城戸口親史³⁾, 小尾 栄子³⁾

HORIKE Miyoko, TAKIZAWA Mitsuko, KITAMURA Aiko, KIDOGUCHI Chikashi, OBI Eiko

要 旨

看護系大学の学生は、学内演習・臨床実習を中心とした過密な教育課程で学習しているため、多忙な学生生活を送っている。そこで、学生が心身共に健康で充実した学生生活を送ることができるよう支援するため、学生の健康状態と生活実態を把握する目的で本調査を実施した。調査方法は質問紙調査法で、看護学部・看護短期大学の学生 518 名を対象とし、調査用紙を配布、その場で記入・回収した。回収率は、84.7%であった。

調査の結果、25%以上の学生が健康状態に不安を感じており、それらの学生のうち40%以上が健康状態で気になることについて「慢性的疲労感」・「精神的不安定」をあげた。学生生活で重視していることは、「学習」・「交友関係」が70%以上であった。学生生活における悩みや不安の内容は、「学業」・「看護師としての適性」が60%以上、「将来の進路」が55%弱であった。

今回の調査により、看護系大学の学生は学業優先の生活をしているものの、学業や進路、看護師としての適性について悩み、心身の健康状態が不安定になりがちであるという実態が把握できた。

キーワード 看護系大学, 学生生活, 健康状態

Key Words Nursing College, Student Lives, Health Conditions

I. はじめに

今日では、将来の職業や具体的な学業内容について明確な自覚を持っている学生が減り、いわば「自分探し」をするために大学に入学してくる学生が増えているといわれている¹⁾。また、多くの学生は青年期特有の発達課題をかかえ、自分が選択した学問分野への迷いも生じやすく、精神的に不安定な世代である。

そのなかにあって看護系大学では、人々の健康を守る専門的職業人を育成するため、全人格的な教養教育と、高度な専門的・実践的教育が行われており、その履修内

容は、学内演習・臨床実習を中心とした過密な教育課程となっている。そのためか保健室では、睡眠不足や慢性疲労・実習中の体調不良を訴え相談に来る学生が目立つ現状がある。

そこで今回、学生が心身共に健康で充実した学生生活を送ることができるよう支援するため、学生の健康状態と生活実態を把握する目的で本調査を行った。

調査は日常生活習慣やアルバイトについても行っているが、今回は、看護学生の健康状態と学生生活の実態について報告する。

II. 方法

1. 調査対象者

看護学部・看護短期大学部に在籍する学生 518 名
(看護学部：216 名・看護短期大学部：302 名)

2. 調査期間

平成 17 年 11 月～平成 18 年 1 月(各学年, 実習期間終了後任意の一日)

受理日：2007年1月19日

1) 山梨県立看護大学 池田キャンパス 保健室：Yamanashi Prefectural University Ikeda Campus

2) 山梨県立大学 看護学部：Yamanashi Prefectural University School of Nursing

3) 山梨県立看護大学短期大学部：Yamanashi Junior College of Nursing

3. 調査方法

質問紙調査法(無記名。質問紙は、他の看護系大学の学生生活実態調査²⁾を参考に研究者らが作成。)を用い、調査期間内で学年ごとに学生が集合する時間を調整し、その場で調査用紙を配布、記入・回収した。

4. 調査内容

質問項目は、基本調査6項目(性別・所属・住居・同居者の有無・通学方法・通学時間)、健康状態4項目(バイタルサインズ・基礎体温測定・健康状態・健康問題)、学生生活4項目(充実度・重視すること・悩み、不安・相談相手)、日常生活5項目(食事・睡眠・学習時間・自由時間・その他の生活習慣)、アルバイト8項目(経験・目的・職種・掛け持ちの有無・時期・日/週・時間/回・学業への支障)で、合計27項目とした。

5. 対象者への倫理的配慮

対象者には、本調査の趣旨とプライバシーの保護を質問紙の冒頭に明記し協力を依頼、同意が得られたものを回収した。

6. 分析方法

調査結果は、Excel2003を用い集計・分析した。

III. 結果

調査対象者518名に対し回答者は439名で、回収率は84.7%であった。回答者の性別割合は、男性3.6%、女性96.4%であった。

1. 心身の健康状態

心身の健康状態については、図1に示す。全体では、「健

康である」・「ほぼ健康である」を合わせ74.9%、「あまり健康ではない」・「健康ではない」・「現在治療中の病気がある」を合わせ、25.1%であった。学年別にみると、大学では高学年になるにつれ、「健康である」・「ほぼ健康である」と回答した割合が高くなっている。また、短大では2年生に「あまり健康ではない」と回答した割合が高く、3年生では「健康である」と回答した割合が高い。

2. 健康状態で気になること

健康状態で気になることがあると回答した学生の割合は、全学生の57.4%であった。そのうち回答内容で高率を示した項目は、図2に示すとおり、「月経」37.2%(注：この項目のみ健康状態に気になることがあると回答した女子学生を母数とした)、「慢性的疲労感」40.9%、「精神的不安定」43.3%であった。学年別に見ると、大学2年生で「月経」、大学1年生と短大3年生で「慢性的疲労感」、また、大学1年生および短大1・2年生で「精神的不安定」をあげた学生が50%以上であった。

3. 学生生活の充実度

学生生活の充実度に関しては図3に示す。全体では、「充実している」・「どちらかといえば充実している」を合わせて71.2%であった。また、「どちらともいえない」は21.4%であり、「あまり充実していない」・「充実していない」は合わせて6.9%であった。

学年別にみると、学年が上がるにつれ充実していると回答した学生が多くなり、「充実している」・「どちらかといえば充実している」を合わせると、大学4年生は77.1%、短大3年生は、79.5%であった。

4. 学生生活で重視すること

学生生活で重視することについては図4に示す。全体

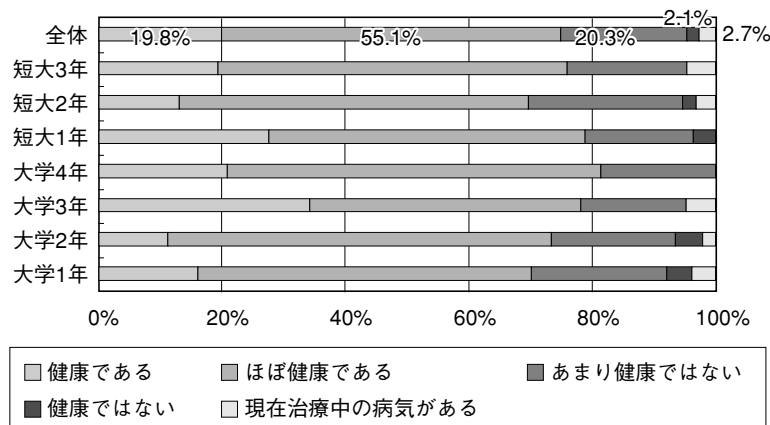


図1 心身の健康状態

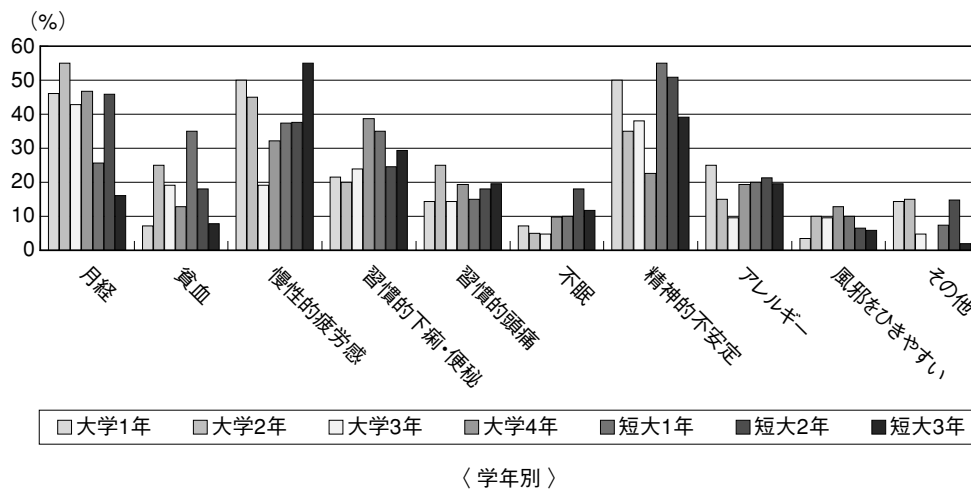
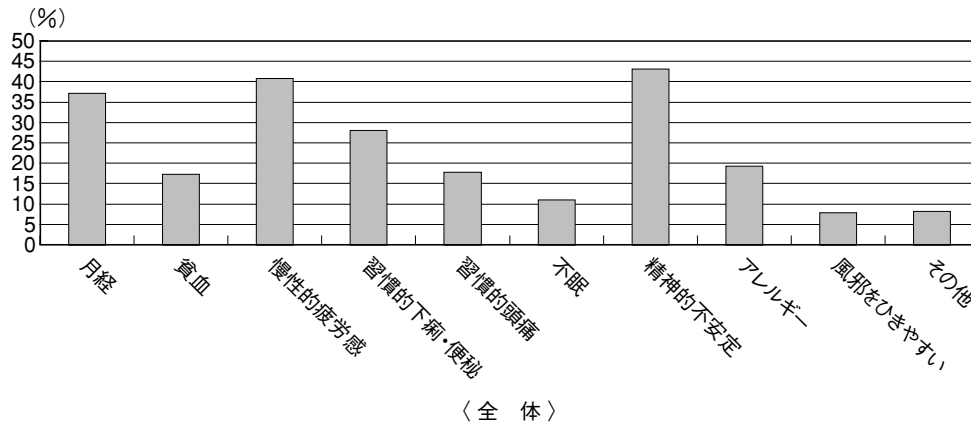


図2 健康状態で気になること

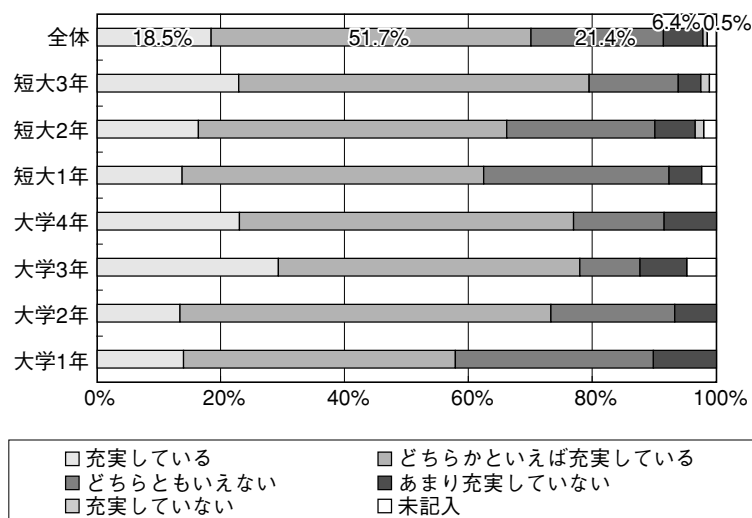


図3 学生生活の充実度

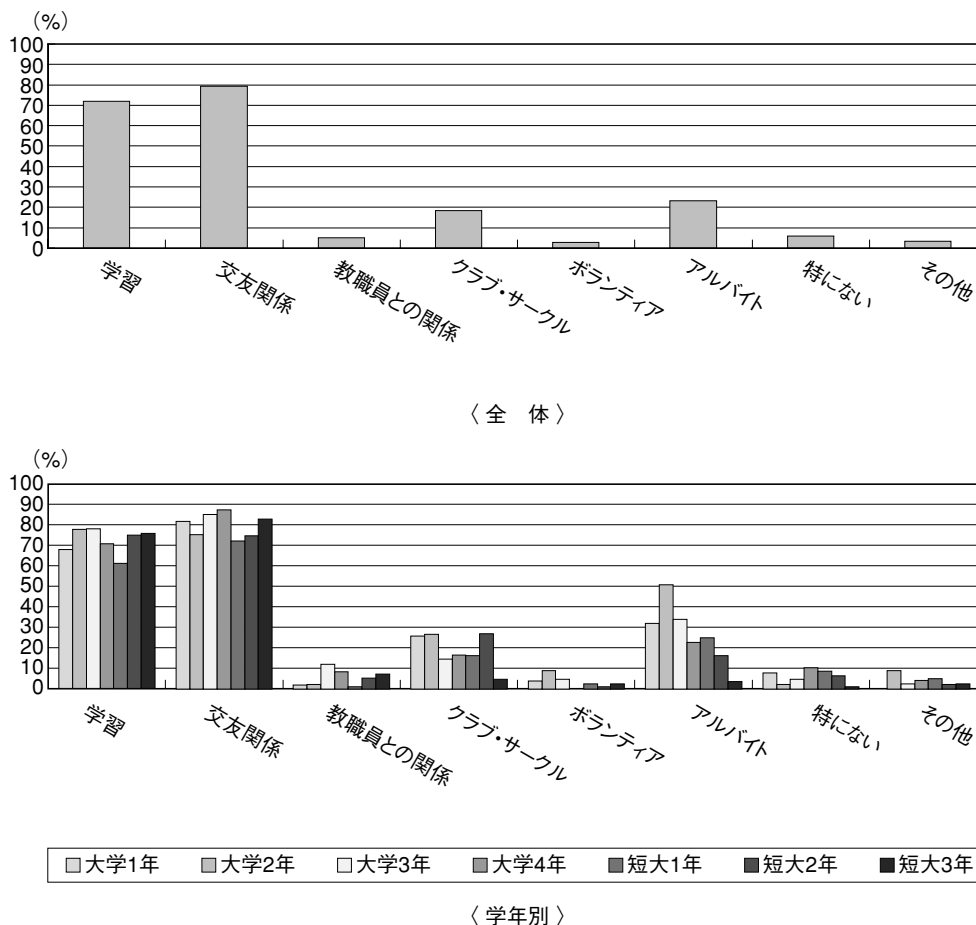


図4 学生生活で重視すること

で高率を示した項目は、「学習」72.0%、「交友関係」79.3%であった。学年別にみると、学年が上がるにつれ「学習」の割合が高くなっている。また、高学年になると「教職員との関係」を重視する割合が増えている。

5. 学生生活における悩み・不安

学生生活における悩みや不安については図5に示す。全体で高率を示した項目は、「学業」62.4%、「看護師としての適性」61.5%、「将来の進路」54.7%であった。

学年別にみると、悩みや不安の割合は大学・短大とも中学年で高くなり、最終学年になると低下がみられた。

6. 悩みや不安の相談相手

悩みや不安の相談相手は図6に示すとおり、全体では「友人」89.1%、「家族」53.1%であり、学年別にみても同程度の割合であった。教職員への相談は、全体では7.3%であったが、学年別にみると学習や進路の悩みが大きくなる高学年での割合が高く、大学3年17.1%、大学4年12.5%、短大3年10.8%であった。「誰にも相談しない」は4.6%であった。

IV. 考察

本調査の結果を考察するにあたり、日本赤十字看護大学が2000年に行った学生生活実態調査²⁾と、全国大学生生活協同組合連合会(以下、大学生協)が、全国40大学生協を対象として2003年に行った第39回学生生活実態調査³⁾の結果を比較対象とした。40大学生協の内訳は、国公立大63.1%・私立大36.9%であり、専攻別では文化系52.3%・理科系41.3%・医薬系6.4%である。

1. 健康状態について

健康状態については、全体の74.9%は心身が健康であると考え、高学年に「健康である」・「ほぼ健康である」との回答が多かった。これは調査の時期が、大学4年生・短大3年生は全課程が修了し、進路もほぼ決定する時期であったことが要因と考えられる。また、低学年の「健康である」の割合が低くなった要因は、今後の本格的な臨地実習に向け様々な課題が課せられ、多忙な時期であったためと思われる。

日本赤十字看護大学が実習期間中に行った同様の調査

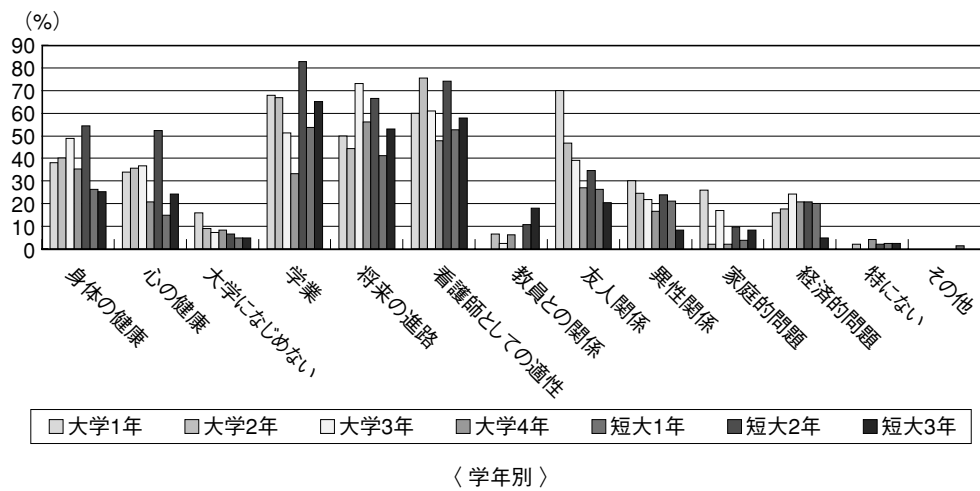
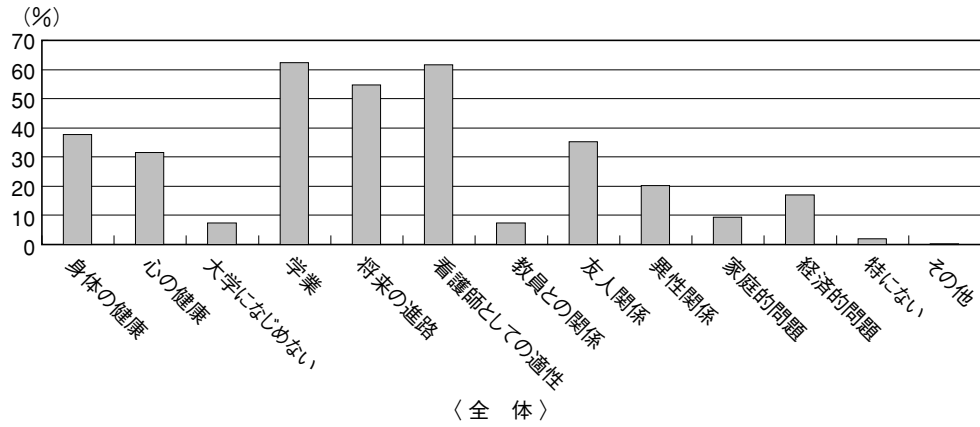


図5 学生生活における悩み・不安

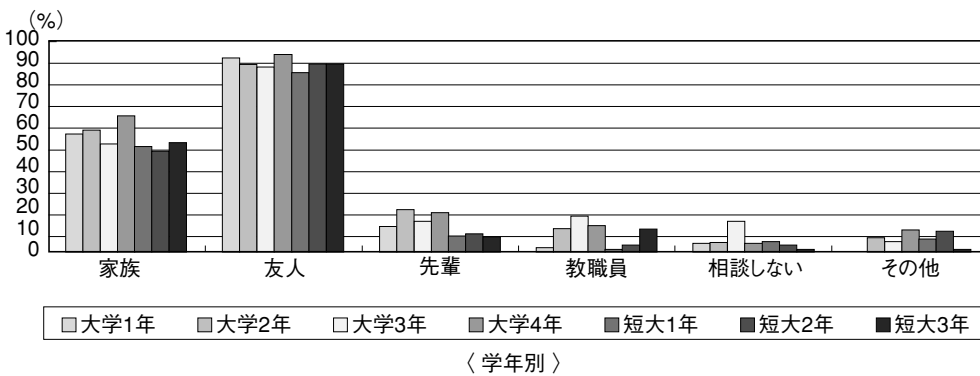
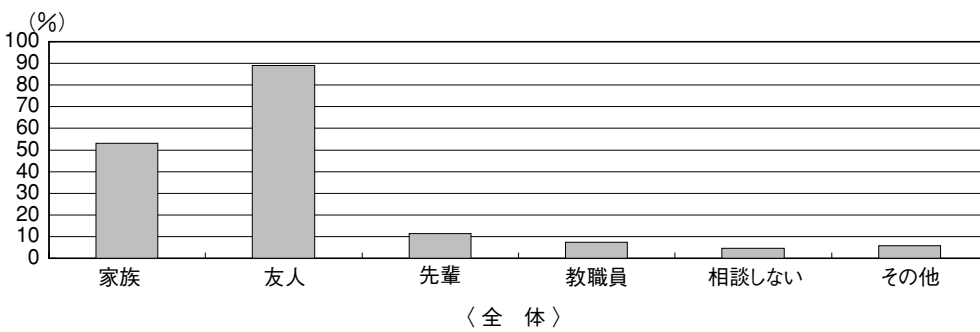


図6 悩みや不安の相談相手

では、大学1・2年生に対して3・4年生の方が疲労や健康状態の不調を訴えている者の割合が多い²⁾という結果が報告されており、実習は学生にとって心身の健康状態に大きな影響を与えていると考えられる。このことから、実習前の準備期間から実習期間中は、特に心身の健康管理に注意すべき時期であるといえる。

自分の健康状態で気になることは、「精神的不安定」・「慢性的疲労感」・「月経」に関するが多かった。

大学生協の調査によると、調査対象大学の1週間の平均登校日数は4.7日で、一日あたりの出席コマ数は平均2.6コマとなっている³⁾。これに対し看護学生は、平日は連日登校し、一日の課程終了後や週末も個人的な学習やグループワーク、実習の記録整理などに時間を費やしている。大学生協の調査で、健康状態で気になることがあると回答した女子学生のうち、「疲れやすさ」と回答したものは24.0%であった³⁾ことと比べると、本調査の類似した調査項目で40.9%の学生が「慢性的疲労感」をあげたことは、看護学生の多忙さが影響しているものと考えられる。さらに、この状況は精神やホルモンのバランスを崩す要因にもなるため、「精神的不安定」・「月経」が健康状態で気になることとして高率になったものと思われる。

2. 学生生活について

学生生活の充実度は、「充実している」・「どちらかといえば充実している」を合わせ71.2%で、高学年の方が充実しているとの回答が多かった。大学、短大とも最終学年は、この時期に実習も終わり進路が決定してくるため、心身共に安定し最後の学生生活を有意義に過ごそうという意識が高まるものと思われる。

充実していると回答した学生の割合は大学生協の調査結果³⁾とほぼ同じであるが、「あまり充実していない」・「充実していない」と回答した学生の割合は、本調査6.9%、日本赤十字看護大学11.4%²⁾に対し、大学生協20.0%³⁾であった。看護学生は、多忙な生活の中で心身の不安定さを感じながらも、充実した学生生活であると捉えている割合が高いといえる。充実した学生生活を送るためには、将来の職業や具体的な学修内容について明確な自覚を持つこと¹⁾が重要である。この点において、看護学生は大学生協の調査集団より高い意識を持って学んでいることから、おのずと充実度も高まるものと考えられる。

学生生活で重視していることは、「交友関係」79.3%、「学習」72.0%であった。大学生協の調査結果が、「豊かな人間関係」19.0%、「勉強第一」26.9%³⁾であることと比べると顕著に高率である。

青年期は、特に同世代との交流を大切にす時期であること、約半数はひとり暮らしの学生であることに加え、看護大学の特徴としてグループワークを行う機会が非常に多いため、看護学生で「交友関係」をあげた割合が高

くなったと考えられる。

また学習面では、看護・保健関係の資格取得という具体的な目標があるため、与えられた課題に取り組む意識が高く、「学習」を重視する割合も高くなったと思われる。

学生生活における悩みや不安については、「学業」62.4%、「看護師としての適性」61.5%、「将来の進路」54.7%であった。大学生協の結果が、「勉学上のこと」49.8%、「専門分野や進路のこと」40.4%³⁾であることと比べ、やはり高率であるといえる。

看護学生は、専門的な学習を行っているが故に、卒業後の進路が保健医療関係に固定化されやすく、柔軟性を持って将来を展望することが難しくなるため、迷いが生じると学業や進路に関する悩みが深くなるものと考えられる。

悩みや不安の相談相手は、本調査では「友人」89.1%、「家族」53.1%であり、日本赤十字看護大学では「友人」62.8%、「家族」17.3%²⁾であった。教職員に相談する学生は本調査7.3%、日本赤十字看護大学0.6%²⁾であった。また「誰にも相談しない」は、本調査4.9%、日本赤十字看護大学12.2%²⁾であった。このことから、本調査の学生は身近に相談相手を求めて問題解決を図っており、実習などを通して教員との関係性が深まるため、高学年になると教職員への相談が増えてくるといった現状が把握できた。

3. 今後の課題

平成17年度に日本学生支援機構が行った「大学等における学生生活支援の実態調査」⁴⁾(調査対象校、日本全国の国公私立大学・短期大学(部)・高等専門学校1,192校、回収率89.3%)によると、近年、学生相談が増加傾向にあると回答した大学が61.7%を占めているが、学内の相談機関が充実しているのは全体の33%にとどまっていると報告されている。

全国的にこのような状況にある中、本調査により、看護学生は他学部の平均的な学生に比べ、学業優先で多忙な学生生活を送り、慢性的に疲労を感じていること、また、専門的な学問を選択しているため、適性や進路への迷いが生じると精神的に不安定になりがちであるという実態が把握できた。このことから、看護学生には、よりきめ細やかな支援体制が望まれる。

今後の学生への支援策として、「大学における学生生活の充実に関する調査研究協力者会議の答申」¹⁾にあるように、教職員の意識・専門性・連携の強化と学生相談窓口の充実が必要となる。また、ピア・サポーターを得るため学生の相互支援制度の導入など、学年を超えた学生交流の機会を設けることも効果的であろう。

学生の生活実態や悩みの特徴に沿った支援を行うため、

教職員・保健師・カウンセラー等が連携を密にし、必要時、迅速かつ適切に対応できる体制を整えるとともに、日頃から教職員等が学生との人間的なふれあいを通じ、気軽に相談しやすい環境づくりをしておくことが重要と考える。

文献

- 1) 大学における学生生活の充実に関する調査研究協力者会議 答申(2000)大学における学生生活の充実方策について. 文部科学省, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/012/toushin/000601.htm
- 2) 武井麻子, 遠藤公久, 他(2001)日本赤十字看護大学 第3回学生生活実態調査報告書. 日本赤十字看護大学.
- 3) 全国大学生生活協同組合連合会 調査担当(2004)第39回学生生活実態調査報告集. 全国大学生生活協同組合連合会.
- 4) 独立行政法人日本学生支援機構(2006)平成17年度大学等における学生生活支援の実態調査[結果報告]. 独立行政法人日本学生支援機構, <http://www.g-shiendb.jasso.go.jp/gsdb/main/tmp/contents/ab00141.html>